
タラスクス～朝の病名～？ 1

鳥海きりう

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タラスクス～朝の病名～？ 1

【Zコード】

N8782P

【作者名】

鳥海きつづ

【あらすじ】

前回の戦闘で重傷を負い、療養していた朝の前に新たなる敵が立ちはだかる。闇を制する紫の飛竜、ヴィーブル。強大な魔力の前に人々が倒れ、国が滅び行く。見かねた聖王守護七騎士の一人・レギンが拳銃し、再び戦いの狼煙が上がる。最愛の？ 盟友の危機を救うべく、朝は再び死地へ赴く。

? · もしあなたが「誰かに自分の話を聞いて欲しい」と思つたら

? · もしあなたが「誰かに自分の話を聞いて欲しい」と思つたら

「よお」

「…」

「いやあ、負けたな」

「…」

「しかしまあ、よくやつたな。敵の拠点を叩き潰し、腕一本と翼一枚もぎ取り、切り札まで使わせた。大収穫だ。奴もあれだけの傷をそろそろには修復できんだろ。その前に俺が奴を見つけ出す。今度は敵の手の内も分かつてゐる。タラスクスを速攻で修理して、もう一発力チ込んで終わりだ。次は勝てるぞ」

「…」

「…!? お、お前!? その耳びうした!/? おい!」

「なんでもない」

「なんでもないことあるか! おい親父! 医者だ! 今すぐ医者連れて来い!」

「医者あ? 無理だよ。こんな時間に」

「家に押し入つて叩き起こせ! 神弥朝が耳から血い噴いて倒れてるって言え!」

「……はあ!? 神弥朝!?!?」

+

酒が飲みたい。

病院のベッドに転がつて、そつと思つた。

主治医の神城にそう言つと、「今飲むと死ぬよ」と言われた。

たぶん本当なのだろ？。

一週間、昼夜も無く眠り続けた。

再び私の世界から『色』が消え、今度は『音』すらも喪った。

+

「姉様あああああ！」

「？　ああ、クララ　　つてクララクララクララちよつとちよつと
ちよつと！」

「ど」

ぽふつとかばふつとか、せめてそのくらいの勢いで来てくれれば受け止めようもあるんだけど、クララは文字通りどじつと両手を広げて抱きとめるのではなく、むしろ両手をクロスしてガードした私をベッドの向こう側へ叩き落すほど勢いで飛び込んできた。

彼女　フロドリナス・アルテミス・クララという娘は、遅刻常習犯の聖王守護騎士団第七席にして、フロドリナス^①兵团を率いるれっきとした　いや訂正、れっきとしているかどうかは微妙なところなんだけど、一応私と同じ騎士の一人。七人の騎士の中では一番若くて一番小柄なんだけど、小さいからと侮ってはいけない。

「手というのは意外と筋力がいる。弦に矢を番えて引き絞り、その状態を維持したまま狙いを定め、指を離して自分の狙った場所に精確に矢を放つというのは、実は結構上等な腕力胸筋背筋腹筋脚力を必要とする。このクララという娘のちまい肉体は、実は私なんかよりよほど戦士として作り込まれているのだ。

そのクララが、私への愛の力だか何だか知らないが、手加減抜きのマキシマムパワーで飛び込んできたわけで。「あれ？　姉様？」

「」

「ね、姉様！？　誰か！　姉様が、アシタ姉様が！」

「うつさい離れろこのバカ！」

背骨が軋む音でキレた私は両手でクララの首を絞め、力が抜けた一瞬にすかさず抱き締めてくるクララの両腕を外し、片手にクララの首を掴んだまま彼女をベッドの下に投げた。「ね、姉様！？ 大丈夫なんですか？」

「大丈夫だから ナースコールは押さずに、そこで正座してなさい」

ぶり返してきた痛みに身体を丸めながら、私はクララに命じる。

別に同情して欲しいわけじゃないけど、童機兵に乗つて戦うといつのは、見た目以上に過酷だ。強烈なGに内臓を圧迫され、至近距離で起こる爆発に眼を焼かれ、コクピットに伝わり籠つた熱が身体を責めさいなみ、人間の何十倍も巨大な機械の敵と戦う恐怖と緊張に神経をボロボロにされる。私が今ベッドで寝ているのは、耳をやられたからだけじゃない。

それでも、昔はいちいち寝込んだりしなかつたけど、今はもう無理だ。「あれ、でも姉様、ケガしたのはお耳じゃなかつたですか？」

「だからって、タックルかましてベアハッグに移行していい理由にはならないでしょ」

素直に床に正座するクララを尻目に、私は口の端だけで笑う。ここはいやしくも聖王守護騎士団次席・神弥朝の病室で、食事の時間まではまだ間がある。ナースコールさえ押さなければ、ここには医師どころか私と同格の騎士ですら許可無く出入りできない。

「クララ、私を心配して飛んできてくれたのは嬉しいんだけど、まあまずはそこに座つて私の話を聞きなさい」

「？ はい、姉様」

「……テニスウェアつてあるじゃない」

「……はい？」

目が点になつたクララを一瞥し、私は続ける。「可愛いわよね、あれ」

「は、はい？」

「可愛くない？」

「は、え、は、はい？　はあ、まあ、可愛いですけど」

「なんであんなに可愛いのかしらね」

「え、はい？　あの、姉様、一体何の話を」

「黙つて聞きなさい」

「え、いや、でも」

「黙つて聞きなさい」

「はあ　　はい」

「あれはつこつこ見入っちゃうわよな。あんなこひらひらしてたら
れ」

「は、はあ。そうですか」

「でも、私達があれを思つたまま可愛いって言ひつけ、それを
着ている人達には迷惑なのよね」

「え、そりなんですか？」

「そりやそりや。彼女達にしたらあれは私達にとつての鎧とかと同じ、いわば戦闘服なんだから。それに対しても可愛いって言われてもリアクションのしようが無いし、むしろそこを評価されても困るでしょう」

「ああ。そうですね」

「貴女だって、武器も持つて鎧も着て、わあこれから戦争に行こうつて時に『かつこいいですね』なんて言われたら、どっちかっていうと腹立つでしょ？」

「ああ。立ちますね」

「私だつて、そんな時に『その竜、強そうですね』なんて言つ奴がいたら殺してるもの」

「いや、殺すのは」

「あなたのさつきのもつまみはそういうことなのよ。自分の気持ちだけで行動したり発言したりしても、その気持せぢやんと伝わらない場合があるし、伝わらなくてあんたが損するだけならまだいいけど、相手にも迷惑をかけるかもって考えないと」

「……え？」

二

- 7

11

1

卷之三

卷之三

やがてクララが、正座したまま小さく手を挙げる。「な、何よ？」

卷之三

ג' נס ציון

1

頃を包え

「ああ、はい、すゞく親しみやすかつたんですけど、すみませ

卷之三

「うわ！？」

私とクラ

に司がいたからだ。「きゅ、急に沸かないでよあんた！」

「貴方なえ、
赤様は聖我人なんぢか?」
心藏こ悪ハ拂き方は上めな

卷二十九

クララが立ち上がり、いつになくきつい口調で司を責める。この二人は仲が悪い。仲が悪いというか、クララが一方的に司を敵視している。

こんな男と何か勘違いされるとしたら それはそれで私
の名譽に関わるんだけど。

「誰だ、お前？」

「はあー!? 誰だー!?

の顔も知らないの！？」

「知らん。だから誰だと訊いている」

「聖王守護騎士団第七席フロドリナス・マリア・クララ！ 言つておくけど一応名乗つてあげたのは貴方が姉様の従卒だからで、問われて名乗らないのは姉様に失礼に当たると思ったからで、本来なら貴方みたいな卑賤の輩に名乗る名前なんてないんだからね！」

「ぐちゅぐちゅどうさこ奴だ。 しかもさつきから勘違いが多い」

「何がよ！」

「まず一つ。俺はお前が何者かと疑問に思つたのは確かだが、別にお前に名乗れと要求した覚えは無い。次に二つ。俺は朝の従卒じゃない。強いて言つならビジネスパートナーだ。そして三つ」

司がクララの襟元を掴み、背中から壁に叩きつける。クララは悲鳴すら上げられず、司を凝視する。

防御もできなかつた。騎士の国、聖ドレイク連合王国でも最強である聖王守護騎士団の一人でありながら、司の動きが見えなかつたのだ。

「言つに事欠いて卑賤の輩とはどういう事だ、貴様。死にたいのか？」

「なあ、貴方、何を？」

「何を考えているの、とでも言いたいのか？ 悪いが何も考えてない。怒りで何も考えられん。お前がそつやつて自分の感情だけで突っ走るのは、たぶん他人に同じことをされたことが無くて、その恐ろしさが身に染みて分かつてないからだろう。お前が卑賤の輩と称する、普通の人間を本気で怒らせるどれほど恐ろしいことになるか！」

「司！」

私の声で司は即座に言葉を切る。「もうやめて。それ以上やると

国家反逆罪になるわ」

「…今さら罪状が一個増えるぐらーい」

「国賊になつたら、私も味方じやなくなるわよ?」「…わかつたよ」

司はクララから手を離し、クララは咳き込みながら服を調べる。

「クララも謝つて。さつきのは言にすぎだわ」「…はい。わかりました。ごめんなさい」

まだ少し不貞腐れているが、クララはそれでも素直に頭を下げた。騎士らしくない、とヤノシユ卿あたりなら言つだらう。騎士は自分の言動に責任を持たなければならぬ。一度自分の意見として口にした言葉は、たとえ何があつても撤回してはならない。たとえそのために決闘になり、そのために命を落としたとしても、最後まで自分を曲げてはならないのだ。私も正直、クララは騎士には向いていないと思う。格好悪いし。よく遅刻するし。

でも、責任の取り方というのは、たぶん一つじやない。

「さて、俺は朝に大事な話があるんだが、外してくれないか?」「…出て行けつて言うの?」

「あんたと朝が友達だか同僚だかレズカッブルだか知らないが、あんたがフロドリナス公国の領主だつて言つなら、何でもかんでも教えてやるわけにはいかない。朝のためにもな」

司は言葉を切り、クララを見る。「わかるだろ?」 フロドリナス卿「…」

クララは司を睨みつけ、その後私に振り返り、「姉様、今度お弁当作つてきますね」笑顔で言い、退室した。 クララのお弁当?

爆発しそうで怖い。

「さて。スケイドの野郎からお見舞いだ。バームクーヘン」「…あんたのは爆発しないでしじょうね」「何だ?」

「別に。 切つてよ」「ん」

司はサイドテーブルにバームクーヘンを置き、自前のナイフで適当に切り始める。「……で、何しに来たわけ」

「あの妹にしてこの姉あり、だな。それが見舞いに来てもうつた怪我人の態度か」

「あんたがケー キ持つて見舞いに来るような殊勝な人間じゃないのは知つてんのよ。それともスケイドの使い走り?」

「馬鹿言え。お前と対等な立場である俺が、お前の使用人の使い走りなんてやる必要無いだろ」

「じゃあ何」

「今日は別に見舞いだけで終わらせてもよかつたんだが、お前がそこまで言うなら仕事の話をしようか

「嫌よ。ていうか無理よ。見ればわかるでしょ この有様」「もうだいぶいいんだろ?」

一瞬、言葉に詰まる。「耳から血が出たからって大騒ぎして一週間も寝倒しやがって。もういいだるといつよりも、もういい加減に起きてリハビリでもしろ。そろそろ動かねえと身体が使い物にならなくなるぞ」

「…大騒ぎしてたのは主にあんたでしょ」

「それをいいことにぐうたら寝てたのはお前だ。…………ほれ」

一口サイズ、といふにはちょっと小さくなりすぎたバームクーヘンを投げて寄越す。「ほら。もう元気」「…」キャッチしてしまったのを後悔しながら、口に放り込む。

「『腕』はなかなかいい値で売れたぞ。いつもは口うるさいスケイドが、久々に何も言わなかつた」

「へえ

「興味無しか

「金のためにやってるわけじゃないもの」

「ま、お前はそれでいいさ。余計なこと考えて仕事に障るよりは、な」

『腕』といふのは、私がもぎとつたケツアルコアトルの腕のことだ。

竜の身体の一部は裏でものすごく高く売れる。なぜ裏なのかというと、竜機兵を保有・生産する権利を持っているのはウチの国、神弥公国だけだからだ。竜機兵は確かに強力だが、その生産と整備には一国の主ですら躊躇するほどの大金がかかる。一台持つだけでもその辺の弱小国は傾くだろう。造るノウハウも設備も国力も、他国には無い。あつても許さない。竜機兵を持つのは世界にたった一つ、ウチの竜機士団だけでいい。そうでなければウチの国の独自性を保てないし、敵国への情報流出を防ぐ意味もある。

だから、何とかして、たとえ大枚をはたこうとも、竜の身体の一部でも手に入れたいと思う奴はどこにでもいる。

どの国にも、探せば必ずそういう奴はいる。

「値切られるような商品じゃないからな。決まらなきゃ他の客に売るまでのことだ。って言えば大概の奴は渋い顔をする。いや、

ぼろい商売だぜまったく」

「じゃあ自分でやれば？」

「そりやこいつちの台詞だ。お前が売る気が無いから、俺がわざわざ外国まで出向いて、原価が知れたら殺されるような暴利で売つてきてやつてるんだろうが」

「頼んでないわよ」

「喉渴いたる。飲むか？」

「…」

差し出された缶ジュースを受け取り、飲む。「全部飲むなよ。俺も飲む」「もう一本買って来い」「そんな暇あるか。喉が渴いたんだよ」「あれだけべらべら喋りやあね」「お前の喉は百字ともたないがな」数えたのか。

「耳も手術すりや治るらしいじゃねえか。さすが改造人間だな

「その言い方やめなさいよ」

「耳が治つたらリハビリに行こう。詐欺師集団の摘発なんてどうだ

?」

「そうね。とりあえず一人は確保できるわね。今ここにいるし

「巨悪を討つには、清濁併せ呑む度量も要るぞ?」

「討つことも無い奴が何を偉そ？」

「最近、政治家や資産家のところに怪文書が届くんだそうだ。怪文書というか、脅迫状というか、身もふたも無い要求というか
架空請求?」

「みたいなもんだな。連中は自らヴィーブルと名乗ってる」

「ヴィーブル」

「翼持つ蝮。輝く眼の飛竜。飛行能力をはじめとした様々な異能力量で聖戦時代の空に君臨しつづけた王者だ。 釈迦に説法かな」

「はつたりよ。全滅させたはずだわ」

「だとしたら、お前は悪の大魔王だな」

「何それ」

「連中の言い分はこうだ。この土地をずっと守ってきたのは自分達だ。この土地が他の人間に荒らされず、お前達が平和に暮らしているのは自分達のおかげだし、この土地に大飢饉や気候変動が無く、お前達が豊かな実りを享受していられるのも、私達の加護があるからだ。だからお前達は私達に感謝を示し、これからも平和に、豊かに暮らしたいと思うなら、それを私達に祈らなければならない。人間に出来ることなど、大自然や私達の力の前ではほんのごく僅かだ。まずは指定された口座に私達が指定する金額を振り込め」

「バカにしてんの?」

「それならよかつたんだがな。事件性も無い
事件になつたわけ?」

「お前みたいにバカにしてんの? って言つて無視する奴がほとんどだった。期日までに金を振り込まなくとも、何も起こらなかつた。しかしその怪文書は期日が過ぎた次の日も、もう一度無視した次期日の翌日にも、全く同じ内容で送られてきた。文面には、金を振り込まなかつたことへの追求は無かつた。ただの一言も、な」

「ある日、業を煮やした資産家の一人が当局に通報した。当局は捜

査の末にこれがかなり大規模な組織的犯行だと判断し、流通経路を辿って手紙の出所も突き止めた。ヴィーブルの名が出ているから当局は一応警戒して、警察と軍の一個分隊が合同で犯人グループのアジトに踏み込んだ

「それで？」

「全滅した」

「は？」

「踏み込んだ捜査員も軍の一個分隊も、少し離れて監視していた後方要員も全員やられた。やられるのがあまりに速すぎて本部には何の連絡も届かなかつた。本部が全滅に気づいたのは、ヴィーブルの名で捜査員と兵士全員の生首が送りつけられてからだつた

「…」

「送りつけられた生首の山には、たつた一言だけの書状が添えられていた。曰く『この土地を守つてるのは、お前達ではない』『…』

「それから、豊かだつたはずの土地がひどい水不足に陥り、作物が育たなくなつた。狩りに出ても山は死んだように何も捕れなかつた。平和だつたはずの町で犯罪が頻発し、それが徐々に国中に広がつていつた

「は！？ 国中に！？」

「いや、実際には国のこと傾いたわけじゃないんだけどな。ある時弱気な資産家が金を振り込むと、その周りの土地だけは回復した。他の怪文書を送りつけられた連中も同じことをすると、その周りだけは元通りになつた

「…ふざけてるわね」

「ああ。で、国主がキレた

「は？」

「そこの国主が自分の軍団を中心に、大規模な討伐隊を編成している。ナメられてたまるかと。居場所が分かつてんだから全軍で揉み潰して討ち取つてくれると。もう法律も裁判も知ったこっちゃねえと。

そういうことだらうな

「はあ 頼もしいような、情けないような」

「だな 放置できんと自ら動くのは結構だが、前の状況から考えて、そのやり方だと必ず犠牲が出る。兵を無駄死にさせるのもよろしくないし、何より自分が死んだら洒落にならん」

「まあ、眞面目に言うのもなんだけど 負けないと思つてゐるんでしようねえ」

「そこで、俺達の出番だ。栄えある聖王守護騎士団に欠員が出る前に、ささつと行つて問題の竜を始末してこいよつ」

「ちょっと、リハビリがてらに詐欺師集団を摘発するんじゃなかつたの？　だいたい最悪私はよくても、タラスクスはまだ直つてないでしようが」

「だから、竜がいるかどうかはわからんだらうが

「は？」

「連中は確かに竜の名前を使つてるが、実際にそれが在るところを見たのは誰もいないんだ。だから、お前が戦わなくともいいかもしない。だが、もし竜がいるとしたら　お前が戦うしかない。他の奴じや死ぬかもしねり」

「私は

「そのくらいの怪我でへばるな。ずっとそうしてきたんだろうが。俺だつてそういうお前を尊敬してるから、女だからつて甘つたるい言葉をかけたりしない。戦え。お前が始めたことだらうが

「」

「…タラスクスが直り次第出発だ。お前はどう思つてゐか知らないが、あいつは意外と早く直るぞ。細かい傷を修復して、無くした武器を発注して、割れた装甲版を張り替えるだけだからな。もう一週間たつてるから、いつ終わつてもおかしくない

「…」

「お前もいつまでも寝てるな。お前にとつてはただの復讐でも、中央への報告書に載せられない不法戦闘でも、お前のやつてることは

誰かのためになつてゐる。俺はやう思ひ

「…」

司が出て行く。

私はそれを呆然と見送り 十分ほどしてから隣のバームクーヘンを見やり、一切れ口に投げ込んだ。

「…あの野郎」

咀嚼しながら、もじもじと呟いた。

+

病院の夜は静かだ。

静かな上に、娯楽も無い。

特にやることも無く、何かやるような体力も無い。消灯時間も真面目か！ と直つぽど早い。

なのでこうして、眠くもないのにベッドに横たわり、静かに深まり冷えていく夜の闇を見つめている。

本当に静かな夜だ。

こんな夜は 『あいつ』が、やつてくる。

「いい仲間を持つたな」

答えてはいけない。

肯定も否定も誰何もしてはいけない。会話を成立させてしまふ。これは幻聴なのだ。まともな人間ならば、絶対に聽こえてはならない音なのだ。私は、まともな人間だ。

私は何から逃れるように、寝返りを打つ。「沈黙 それが

君の答えか」

「しかし、何故だ？ なぜ君は、私の存在を否定しようとしているんだ？ そうすることに何かメリットがあるのか？」

あなたの存在を認めることが、私の精神が異常だと認めるのと同じだからよ。

と答えそなつて、すんでのといひで止めた。「何だつて？

「おいおい、それはどういうことだ？君の価値観では私の声が聞こえると頭がおかしいことになるのか？それは私としては非情に心外だし、不愉快だ。どうしてそういう理屈になるのか、具体的に説明して欲しいものだな」

「他の大多数人には、あなたの声は聞こえてないからよ」「私は、神など信じていない。

ついでに言えば、靈も信じていない。ただ、私もなんだかんだで百年ばかり生きてるから、見たことが無いと言えば嘘になる。靈現象という奴の経験もある。ただ それでも私は信じない。そんなのを恐れたり頼つたりすると、その代わりに自分が弱くなつていくような気がする。

戦争は、そんなものよりずっと非情で残酷だ。そんなものに今までいたら、現実では絶対に生き残れない。死んだ時に自分が後悔する。余計な時間を使って損した気分になると思う。

だから、私は神なんか信じない。いるとも思わない。特定の宗教に入信したこともない。

世の中には私なんかよりずっと真剣に神様を信じてる人がいるのに、どうして私なんかに、こんな声が聞こえるんだろう。「君の疑問はもつともだ」

「しかし、私は何も君だけを選んで語りかけているわけではない。私は全ての人々に語りかけている。私の声が聞こえていない大多数の人というのは、注意力が足りなくて私の声に気づいていないか、私の声が聞こえているくせに聞こえないふりをしているかのどちらかだ。それが君達の感覚で普通だとするなら、やはり私にとつては心外で不愉快だ。無視されるのが普通とは。

しかし、確かに君は普通ではないようだ。私の声を精確に聞き取り、それに対して的確な受け答えをして会話を成立させると、これは、誰にでも出来ることではない。そういう意味では、確かに君は珍しい例だと、私も思う」

「なんで私なの」

「別に私が君を選んでその能力を与えたわけではないし、君が望んでそうなつたわけでもあるまい。いわゆる巡りあわせだらう」

「…」

本当に、いつからこうなつてしまつたんだろう。

私にこの、聴こえてはいけない幻聴が聴こえるようになつたのは
「あなたの」「うん?」

「あなたの声を聞くためには、今の私みたいに特殊な能力が必要なの?」

「いいや。君が私の声を聞いているのは、いわゆる超能力などではない。神を見るのに、神の目は必要無い。人並みの注意力があれば、誰でも私の存在に気づくはずだ。君の場合は、その注意力が人並外れてしていると言えるが」

「なんで」

「言う必要があるのか? それとも言わせたいのか?」

「言いなさいよ。なんで私なの」

「その注意力で、君は生き残ってきたのだろう?」

「…」

騎士やめようかな。「帰つてよ。お呼びじゃないわよ

「つれないな」

「なんで私なの」

「ここで全く同じ質問を繰り返す意味がわからないな。それとも言わせたいのか?」

「私は神様つてのは、今にも死にそうなくらい困つてる人とか、あんたを心の底から信じてる人に話しかけるもんだと思つてたわ」

「もちろん彼らにも語りかけていい。いま君と語らつているのと同じように」

「それが本当なら、あなたの声は九分九厘まで届いてないわね」

「それは私にとつても悲しい現実だ。世の中には注意力が足りないばかりか、自分から耳を塞いでしまう人もいる。本当に残念でならない」

「残念でならない、で終わり?」

「何?」

「あんたが本当に神様なら、その人の耳をこじ開けるぐらにはやってみせなさいよ」

その一瞬、私の心がざわついた。

それとも、ざわつく何かが私の心を殴りつけたのだろうか

「それは、できない。それはできないのだ。私には」

「無能だから?」

「確かに私は全能ではない。しかし、それが理由ではない」

「ルールもあるの?」

「そういう捉え方で構わない」

「知ってる? ルールは守らなきやいけないけど、ルールを破れない奴ってのは、他人にとつては何の役にも立たないのよ。いざつて時に何もしないから」

「それは、そういう場合に不法なもの助けを求めるのは、心が弱いものの考え方だ。本来はそういう時にこそ、私は君達の真の力を見せてほしいのだ」

「あんたが神様なら、そういう本当に弱い人こそ助けてあげるべきなんじやないの? それともあんたも今の人間どもみたいに、そんな弱い奴は死んじまえって思つてるクチ?」

「」

「」

激しく心が波打つた。静かで心地良い夜なのに、私は恐怖を感じた。

それは、隣にいる人間に怒りを向けられた時の感覚と、似ていたかもしけない。

「すまない。しかし、わかつてほしい。それができないばかりに、私が身を裂かれるほどに苦しんでいることを」

「…あんたに身は無いでしょ」

「私は君や君達を通して世界を見ている。君が喜べば私も喜ぶし、

君が哀しめば私も哀しむ。君が死の恐怖を感じれば私も感じるし、君が死の苦痛を感じれば私も感じるのだ。それを自分の力で止められないことを、私が歯痒く思っていることもわかつてほしい」「だったら辞めれば？ 見るのを辞めれば、もう辛くないでしょ？」

「それは、私の存在意義を、ひいては私の存在そのものを否定することだ」

「だから、してんのよ。役に立たないなら、要らない」

「君は同じ事を、他の人間にも言えるのか？ お前は私の人生に役に立たない。だから要らない、と？」

「」

「思い浮かべた。司、クララ、レギン、陛下、ウォルギネ、他の騎士達、ゲド、スケイド

言えるのだろうか。

「もつと君と話していたかつたが、今夜はこの辺にしておこう。これまで以上はお互に心がさされただけだ。君にとつても貴重な休日の夜だろう」「」

「…よくわからないけど、帰ってくれるのは大歓迎だわ。おやすみ」「ああ、おやすみ。また来るよ」

「来なくていい。というか、役に立たないのはまあ許すとしても、こないだみたいに邪魔するのは許さないわよ」

「あれは邪魔したわけではない。そうそう、それも言おうと思つていた。君はもつとよく考えるべきだ。大切な命を削つて戦うことが、本当に君の人生の喜びにつつながるのかどうか」「

「考えるまでも無い」

「君は、私の声をよく聞いてくれる貴重な友人だ。その君が戦争が終わつた今もその命を危険に晒し、あまつさえ戦いの高揚感に慣れ親しみつつあるのが、私は心配でならないのだ。こうして助言していることも、私にとつては重大な不法であることをわかつてほしい」「なら、要らないよ。余計なお世話」

鬱陶しくなり、私は頭から布団を被つた。

夜の闇すら見えない、本当の暗黒が訪れた。

もし、この一連の会話が全て私の幻聴だとしたら、私はもう誰にも、何の言い訳も出来ない。私の心はもうぶつ壊れている。

その事実を突きつけられるのが、怖い。

だから、まだ医者にもかかってない。

+

翌日、私は眠い目をこすりながら、朝早くに呼びつけたのに時間通りに現れた客を迎えた。

「ごめんねスケイド。忙しいのに呼び出して」

「とんでもございませんお嬢様。お加減は如何ですか」

スケイドは私の城の執事で、実はあんまり政治の上手くない私に代わって色々と水面下で動いてくれている貴重なブレインだ。はつきり言ってかつこいい。超頼りになる。私や司よりずっと年上に見えるが、残念ながら私のほうがもうとずつと年上だ。ほんとに残念。「もう随分いいわ。あとは耳だけ治して終わりよ」

「くれぐれもご自愛ください。お嬢様に万一件があるばこの国がひいては聖ドレイク連合全体の防衛が成り立ちません」

「案外、そうでもないんじゃない?」

「またそんなことを」

この超デキる男のスケイドは、残念ながら私の領地で育った人材ではない。聖王親政府を隔てた向こうの連合第一領、ヤノシュ卿が治めるチエルヴィング公国からやって來た。というか、そこのチエルヴィング剣士団で副長をしていた。つまり、ヤノシュ卿が自分以外で國で一番強いと認めた剣士なのだ。文武両道。また一つかつっこいい。

そんな貴重な人材を、ある口どういうわけか私にくれると言い出した。陛下の口添えもあつた話なので、私は拒否する理由も暇も

無いまま、彼を自分の城に受け入れることになった。私がいなくても私の領地を統治でき、白兵戦では私よりも桁外れに強い彼と、一つ屋根の下で暮らすことになった。

「彼は私にとつて、喉元に突きつけられたナイフなのだ。

「別に、自虐的になつてゐるわけじゃないんだけど スケイドがいてくれると、私も気楽に出撃できるなあと思って」

「それはいけませんね。今日からは手を抜いて仕事しましょ」

「ダメだつて」

「穴だらけの仕事をします」

「勘弁して」

「溜まつてゐる書類をここに送りつけます」

「マジ勘弁して」

「大丈夫です。適当にハンコ押してくださいれば結構ですから。あと私は私がその書類を適当にバラまいておきます」

「ところで、他国からヴィーブルに関する問い合わせが無かつた? 無表情にバカ言つていたスケイドが、一瞬止まった。

「…あの男ですか」

一瞬、後で司がスケイドにとつちめられてゐる光景が浮かんだ。
まあいいか。

「うん」

「お嬢様の耳には入れるなど言つておいたのですが

「まあ、あいつにとつては貴重な飯の種だからねえ」

「そこが気に入りません。利害が一致するとはいえ、あのような男をお嬢様の近くに置いておくのは賛成できません。あの男の存在は、この国にとつてもお嬢様にとつても、汚点にしかならないと考えま

す

「かもね」

「何故ですか? 何故中央に報告できない裏帳簿を作り、あのような男の手を借りてまで、竜を狩る必要があるのですか?」

「…

スケイドには、本当の理由を教えていない。

自分で時々不思議に思う。スケイドにすら教えていないことを、どうして司には教えたんだろう。

必要だから、だろうか。「理由ならあるよ、スケイド」

「平和のためよ」

「平和」

「そう。竜は人類の平和を脅かす外敵。だから滅ぼさなければなりません。私はその思いでずっと、百年前から戦ってきた。今さら変える気にはなれない。これは中央への忠誠よりも重い、私の国の国是なのよ」

「ならば、それを王に上申すればよろしいではないですか。隠れて事を行う必要などありません。お嬢様の思いが届けば、むしろ中央の支援をも受けられましょう」

ところで、スケイドは年上の私を『お嬢様』と呼ぶ。執事だから? でもちょっと変だ。

一度それについて訊いてみると、

「不適切でしょうか? やはり正しく朝伯爵か、お館様か、あるいは閣下とお呼びしましょうか?」

クソ真面目に聞き返され、「えー、あー、……いや、お嬢様でいいよ」と、なんとなく許可する感じになつた。

「私が表立つて動くと、皆不安になるでしょう? この国は 連合全体は、まだ生まれたばかりなのよ。今は外敵のことなど思い出させず、敢えて過去の戦争も思い出せたせず、国力の回復と発展に力を向けるべきなの。それに」

スケイドを見る。珍しく私が長い台詞を喋ったので、驚いているようだ。「中央の支援なんか、必要無い。私一人で始末できる」

「お嬢様」

「何か質問?」

「……いいえ。十分です。よくわかりました」

「うん。よかつた」

嘘を吐いた。最も信頼すべき、そして実際最も信頼できる部下のスケイドに、嘘を吐いた。

なぜ私は、最も信じているはずの人に、嘘を吐いているんだろう。

「それで、スケイド。ヴィーブルについて何を訊かれたの？」

「今まで生き残っている可能性があるかどうか。それを人間が制御できる可能性があるかどうか。戦うとすればどれほどの能力で、倒すためにはどのような装備が必要か」

「なんて答えた？」

「カタログスペックと聖戦時の主な戦歴　どこの戦場に何機が現れ、どんな戦闘を行い、何機がどのように撃墜されたかを渡しました」

「あれ。スケイドにしては氣前いいね。誰が訊いてきたの？」

「書状には、国主殿の署名が」

「マジで？」

「当領の存亡を懸けた一戦にあたり、竜殺しの先駆たる貴国にご教授を願いたい、と

「…マジで？」

「お嬢様。これは同盟国の救援要請に当たります。中央への報告も事後で十分でしょ。誰にはばかることも無く、正式な手続きで出撃できます。むしろそうしなければ、礼を欠いて助力を請つてきました先方に失礼に当たりましょう」

「…ふふ」

いつになくまくしたてるように話すスケイドを見て、私は思わず笑ってしまった。スケイドはきっと、『正式な』出撃をする私が見たいのだ。いちおう人から騎士様、勇者様と呼ばれる立場のくせに、普段は人目を忍んでこつそり出撃しているから。

誰かを傷つけ、何かを壊しに往くのに、何をそんなお天道様に誇ることがあるんだろう。

「私は行かないよ、スケイド」

「お嬢様！」

「だつてもう一回読んでみんさいよスケイド。書状には『教授を願いたい、って書いてあつたんでしょ？ 助太刀してくれとも援軍出してくれとも書いてないじゃない。自分で片付けるつもりなのよ。行く必要無いよ』

「必要な問題ではありません。お嬢様の信頼の問題、もっと言うなら品格の問題です」

「国主としての？」

「それです」

「誰が私に国主の品格を期待するの？」

「お嬢様」

「スケイド。品格つてのは周りの需要で決まるのよ。周りがそれを求めなければそれは無価値だし、もちろん逆に、周りが求める分だけのそれを備えていなかつたら、そいつに人望は集まらない。低すぎてもいけないけど、だからって高けりやいいつてもんじやないのよ」

「しかし、それでは我が国の威信を世に示せません」

「なら、スケイド」

威信。威光と信頼。人を従わせる力。人に信じられる力。

そんなものが私にあるとしたら　　「我が国の威信つて、何？」

「

「答えて、スケイド。これからも私とやつていくなら

「力、です」

「力？」

「はい。世界最強の竜の力　　それを従える唯一最強の軍団。その力をもつて国と民を守ること　　それが我が国の威信だと認識しています」

「違う」

全然違う。0点だ。

守るだつて？ ふざけんな。

そんなヒーローごっこがやりたくて戦ってきたわけじゃない。

仲良しこよしなら他所でやれ。

威信なんものがこの私にあるとしたら、それはたつた一つ殺すための力だ。どんなに強くて怖い敵にも決して逃げず、どんなに傷つき、血反吐を吐いてもなお立ち上がり、手心も仏心も一切加えず、あのクソおぞましい竜共を粉碎する。その地獄の力が私の威信だ。スケイドが言っていることは一見私と同じに見えて、実はてんて正反対のことを言っている。マルどろか三角もあげられない。私が今こうして騎士となり、人から英雄ともてはやされているのは、誰か見ず知らずの人を命がけで守つたからじゃない。

あいつがいれば俺が死ぬ確率が減る

あいつがいれば俺はあの恐ろしい竜と戦わなくて済む
そう考えた奴がいたからだ。仮に私が本当に、見ず知らずの他人を守るためにママにもらつた大事な命を平気で投げ打つ狂人だとしても、そんなの何の関係も無い。

「この世界では、そんな私を誰も必要としない
「必要とされなければ、やらないのか？」

「心よ」

唐突に頭に響いた言葉を完全無視し、私は言った。「心」「恐怖に負けない心。痛みに負けない心。最後の最後まで油断しない心。敵を倒して生きる空しさに負けない心。それががあればいい。力なんか無くていい。その心が希望で輝いていればなおいい」

「それでは受身に回る一方だな。その考え方では君が損をするばかりだぞ？」

頭痛がする。

「大丈夫よ。騎士がやるって言ってんだから。信頼されるのも大事だけど、信頼するのだって大事でしょ？」

「お嬢様」

「疲れたわ。もう帰つて。一応タラスクスはすぐ動かせるように。」

退院してからまた状況を聞きます

「　はい」

それで、スケイドは出て行つた。

心にも無いことを言つた。

スケイドが沢山の花を差してくれた花瓶を壁に投げつけ、慌てふためく看護師の声や、なだめすかすように私に話しかける看護師の声を尻目に、私はひたすら眠つた。

もつ氣づいた人もいると思つけど、私はスケイドが苦手だ。

たぶん、本当は苦手だ。

彼といると、自分までちゃんとしなきゃいけないような気分になる。落ち着かない。

嘘を吐くのも、信じていられないわけじゃなくて 止められると思つているからだ。

もし仮に止めないとしても、きっと何かしらの形で氣を回すだろ？。

面倒くさい。

そういうことだ。

+

ところで、その日は私の耳の手術の日でした。

いつたん出て行つたスケイドも一秒後に戻つてきて「今日は大丈夫ですか？」なんて訊く始末だ。

ともあれ、手術は無事に成功し、私はもとの聴力を取り戻し、即日退院した。

普通はまだしばらく様子を見たりするんだろうけど、私にはそんな暇は無い。隣国が危機に晒されているといつのに、だらだら寝てなどいられない。幸い私の身体は普通の人よりも頑丈だ。

という台詞を、私が喜んで、あるいはじく当然のこととし

て吐いているとは思わないでほしい。「嘘つけ」

「ほんとは寝てんのに飽きたんだる。自分が」

「それもあるけど。どちらにしろ寝てられないでしょ」

「その通りだな。何にせよマジメに仕事する気になつたのはいい事だ。歓迎するぜ」

「何を偉そうに」

「しかし大丈夫なのか？ 出で行つてからやつぱり無理、じゃシャレにならんぞ。死ぬのはお前だからな」

「…」

私は隣を歩く司を見る。甘い言葉はかけないといつたが、こいつは人が退院する時に花の一つも持つてこない。スケイドとはえらい違ひだ。

さつきの大丈夫か？ つていうのも心配はしないけど一応言つてみた、みたいな意味じやない。それ以下だ。こいつは私の心配なんか欠片もしていない。心配するという発想すらない。ただ私の今の身体の状態がどうなのか、それによつて仕事に支障をきたすかどうか、私にやる意思があるのかどうかを知りたいだけだ。心も何もこもつちゃいない、ただの業務上の確認だ。

「糞喰つて死ね」

「何？」

「何でもない」

「おい、待て。何でもないつてことはないだろ。今何つった。もつかいと言え」

「さあ、やるわよ。あの馬車？」

私は明るい声で訊き、訊くまでもなくウチの城の紋章をつけてる馬車に駆け寄る。「おはよう、メインソーン！」「お帰りなさいませお嬢様」御者のメインソーンに何日かぶりで挨拶し、後ろをのろのろついてくる司にその笑顔のまま振り返る。

「…」

何か言いたそうだつたが、もつ知らない。無視して馬車に乗り込む。司も乗り込み、私の隣に座る。「で、今度はどこ?」

「…南だ」

「南?」

地図を思い浮かべる。聖ドレイク連合王国は北と西が海に面し、南に新興の小国家群、東に最大の隣国であるスコルピア連邦が居を構えている。そしてウチの神弥公国は、連合の中でも最北西に位置し、つまりは最も隣国の脅威が少ない位置取りになつていて。

「これは別に適当に決まつたわけでも、私が特別扱いされているわけでもない。つまりは機動力の問題だ。ウチの竜機士団は歩兵や騎兵よりもずっと速く移動できる。仮に連合の最東端で戦端が開かれたとしても、前衛の騎士達が敵を防いでいる間に救援が充分間に合つのだ。

そして、ウチの国の東には同じく機動力のある騎兵団を率いるマルガリタ、南にはウチと同じく七軍団でも最強といわれる魔導師団を率いるレギンが領地を頂いている。ちなみに南東はラタトスクの領地と聖王親政府だ。

「え、南?」

「そうだよ。詐欺師の横行にキレて軍団を編成してるのはアレクサンダー・デモクルス・レギン卿。死ぬかもしれない戦いに駆り出されてる可哀想な軍団はは最強と名高きレギン魔導師団だ」

「ええええ!?

「やっぱり行くの止めとくか? お前の恋人の手並みを拝見するのもいいだろ」

「誰が! ちよ、メイン早く出して! 何やつてんのあいつは!..」

「やっぱり心配か

「誰が!」

七人の騎士は戦士としての顔と別に、施政者としての顔も持つてゐる。たとえばヤノシュ卿なんかは余計なことには一切お金を使わない『ドケチ政権』。マルガリタは自分が子だくさんだから女と子供に関する事には滅茶苦茶手をかける『超女系政府』。私のところは九分九厘までスケイドに任せきりなので、実は自分でもどうなってるのか分からない。城にクレームのお便りが殺到しないところを見ると、まあうまくはいってるんだろうけど。

で、アレクサンダー・デモクルス・レギンは、七人の中でも特に温厚で、民に優しい領主と言われている。優しいだけでなく要望嘆願もちゃんと聞く。七つの連合領の中で最初に民主議会制を導入したのもレギンの国だ。

そんなレギンが国民を脅かす詐欺集団に怒り狂い、軍団を召集して解決に乗り出したというのは　わかるような気もするし、やつぱりおかしい気もする。

メインソンに馬車で駅まで送つてもらい、そこから列車で四、五時間。私の国よりも北にあるレギン領との国境の山道は、いつもむせ返るような豊かな緑で私を迎えてくれるのだが　「…何にも無いね」

「…あれだな。道まちがえて違うとここに来たかと不安になるな」
峠を越え、緩やかに下り始める山道は、北国のような凍てついた空氣と霜の残る土、枯れた草木のなれの果てで覆われていた。
違う。ただ枯れているわけじゃない。

腐っている。

腐乱し、醜く土に融けた草や木や　それ以外の何かが、恨めしげに私を見つめている。「ただ枯死してるだけならいいが、この分だと何か悪い菌が繁殖してるな。放つておくと疫病の原因になるぞ」

「…ヴィーヴルじゃない」

私の知ってるヴィーヴルには、こんな能力は無い。「しかし、人間技とも思えんな」

「…魔法？」

「その線も考えたが、大掛かり過ぎる。國中がこんな有様だとすると、それをやるにも人間の魔力じゃ到底追いつかない」

「…だよね」

「… しいて言つなら、それこそアレクサンダー・レギンなら、で
きるかも知れんがな」

「何のために」

「本人に訊けよ。もうすぐ会える」

「本気で言つてんの？」

「まさか。 だが、全てがレギンの自作自演だとすれば、色々と
説明がつくるのも確かだ」

「え？」

私は思わず司を見る。司は私から顔を逸らし、目を伏せる。 「…
寝る。お前も休め。向こうに着くまでは仕事の時間じゃない」

「ちょっと待つてよ。それどういう意味？ あんた何か知つてんの
？」

「俺はお前ほどレギンを信用しない。お前も油断するな。俺達は
旅行に来たんじゃない。戦いに来たんだ。これから俺達が行くのは
戦場だ。もつと言や敵地だ。仕事とプライベートは分ける」

私は返す言葉も無く、司を睨んだ。いちいちムカつく言葉遣いし
かできない奴だ。 なのに、司の言葉を否定しきれない自分がい
る。

今度のレギンの行動はおかしい。何か裏があるかもしだ

い

私は頭を振る。 「… レギンはそんな奴じやないよ」

「へー」

「… 何そのやる氣の無い返事」

「別に返事したわけじゃない。今のは俺の実家の方言で『腹減った』
つて意味だ」

「… ふざけやがって」

「俺はお前のそんな乙女な台詞が聞きたいわけじゃないんでな。いつもみたいにもつと叫べ」

「…私を何だと思つてるわけ」

馬車は山道を下る。麓に町が、その間にいくつか天幕が張られているのが見える。

旗に描かれた紋章は『』。レギン魔導師団。

+

私と司を乗せた馬車は、町の大通りを静かに通り抜け、湖のほとりに布陣しているレギンの軍のもとにやつて來た。この町は山の縁と湖の蒼に囲まれ、他国との交通の要衝という立地もあって、普段は静かでもなんでもない。もの凄く栄えている。いつもだつたら物見高い町人が「あん？ 何だあの馬車？」「バカお前知らねえのか。あれが隣の領主の神弥様だよ」「かみやさまー、こんにちわー」とか寄つてくるものなのだが、今日に限つてはそれも無い。うるさいなあ、はいはい派手な馬車で悪かつたね、何、顔出して手振らなきやいけないの？ 笑顔で？ 面倒くさいよスケイド とかいつもは言つてたものだけど

無いなら無いで、結構淋しい。

「ここでいいよ、メイソン」

「よろしいので？ まだ少し距離が」

「まん前まで馬車で乗りつけたら警戒させるでしょ。ただでも戦闘前で気が立つてるんだから」

「…大丈夫か」

「山賊のアジトに行くわけじゃなし、いきなり突つかかれたりはしないわよ。 あんたは知らないけどね。この国でなんかやつた

？」

「…やつてねえよ」

「あつそつ。じゃ行」

私は馬車を降り、天幕が並ぶレギンの陣へと歩き出した。同も馬車を降り、数歩離れてついて来る。「行つてらっしゃいませ、お嬢様」メイソンの声にひらひらと手を振る。

「ちょっと、貴女！」

陣に入り、天幕をいくつか通り過ぎたところで、一人の女性兵に呼び止められた。「何者？　ここで何をしているの？」

「ここに指揮官に会いたいんだけど」

「指揮官？」

「そう。小隊長とか大隊長じゃないよ。一番上の指揮官」

「本気で言っているの？　ここがどこだか分かつてる？」

「本気だし分かつてるよ。　あれ。貴女こそ、私が誰だか分かつてる？」

「え？」

しばらぐ、私と兵士の会話に間が空く。「　知らない、か」

「　というか、お前の訪問の仕方がおかしいからだ」違いない。

「…名乗らないと、話進まないよねえ」

「俺が説明してやつてもいいが　嫌だら？」

「うん」

私は心中だけでため息を吐き、気持ち背筋を伸ばした。

「聖ドレイク連合第一領、神弥公国の公主、神弥朝です。アレクサンダー・デモクルス・レギン閣下にお会い通りを願います」

「え？　な、何？」

「公式な訪問ではありますんで、連絡が無いのは当然です。突然陣中に訪問する無礼はお詫びします。閣下にお取次ぎください。

「これ私の名刺」

「め、名刺？」

「ほら見てここ。うすーくウチの紋章が入ってるでしょ？　ウチの紙幣と同じ透かし技法を使ってて、これとウチの紙幣だけは誰にも偽造できないの。偽造しても透かしの濃さとかラメの光具合ですぐ分かる」

「は、はあ

「……」

「……」

「早く行つて見せてくるー。それ見せれば私が本物かどうか分かるから!」

「は、はい!」

兵士は私の名刺を手に、慌てて陣中を駆けていった。「…お前そんなステキな名刺作つてたのか」「私ってほら。若く見えるから。初対面だと疑われることが多くて」「自慢のつもりか」「ううん。

事実」

「お待たせ、しました」

「おお、早」

さつきの兵士はすぐに戻ってきた。さすが、レギンの兵は練度が高い。「先程は失礼致しました。団長があちらの天幕でお待ちです。お通り下さい」

「あれ?」

「珍しいな」

そう、珍しい。いつもレギンは頼みもしないのに出入口までやって来て「やあ! 神弥卿」とか言いながら出迎えてくれたものなのだ。

それが今田は「僕がいるところまで歩いて来いバカヤロー」と言つていて。「レギンじゃないのかな?」

「別の奴が指揮を執つてる? だとしたらレギンは今どこだ」「知らないよ。とにかく、行く」

+

他のより気持ち大きいくらいで、レギンの天幕は兵士に「あれですか」と指されなければ他のと一切区別がつかなかつた。別に豪華にする必要は無いが、せめて旗の一つぐらい立てればいいのだとと思う。

「バカだな」

「旗なんか立てたら、僕がここにいるのが敵にバレるじゃないか」「でも、これじゃ味方もあんたがどこにいるのか分からないでしょ」「そんなバカは僕の軍団にはいなーよ。自分の味方がどこにいるかなんてのは、最初に布陣したときに憶えておくべきだ」

それがコロコロ変わるから旗が必要なんでしょう」と言いかけて止めた。言つても無駄だからだ。たぶんレギンはどうしても必要なとき以外、自分の城にすら旗を揚げてないのに違いない。常に民や兵士と同じ立ち位置でありたい　　というのがレギンの唯一絶対の信条なのだ。

誰に聞きどがめられるか分からぬから口には出さないけど
気にしそうだと思つ。「相変わらず、味も素つ氣も無えな」

「質素なんだよ」

「旗が無いのは最悪いとしても、護衛すらいねえじゃねえか。あいつは馬鹿か」

「入った瞬間、その発言を彼に報告していい?」

「あいつは馬鹿か、以前の発言ならいいぞ。最後のは独り言だ」「最後のだけするよ。それ以前のを私が言つと内政干渉に当たるから

ら

「…」

黙り込む司を尻目に、天幕の入り口をくぐる。「ほんにちわー」

「…ああ

「…」

天幕の中央には円卓といくつか椅子が置かれ、円卓には周辺地図が載せられていた。そして円卓の向こうには、やっぱりというか何というか、普通にこの軍団の指揮官、アレクサンダー・レギンが座っていた。

ただし、円卓に置かれた茶器の数は、二つ。「…」「…」レギンの他にもう一人、司に負けず劣らず田つきの悪い男が、脚を組んで椅子に座り、私を睨みつけている。

「やあ、神弥卿」

「…お二人とも、お疲れ様です」

「お疲れ様です、があるか！」

開口一番怒鳴りつけられた。耳に小指を突っ込んで調子を整えて
いると、男が椅子から立ち上がり、ずかずかと私に近づいてくる。
「うわ、ちょっと何よ！」

胸と思つたら、その少し上の襟元を掴まれた。

「貴様、どういうつもりだ！」

「な、何がよ！？」

「何がもクソもあるか！ 貴様、冒頭の騎士会議の件で俺の紹介だけ飛ばしただろう！ 他の連中は紹介しておいていざ俺の段になつたら面倒くさい、やめた、とはどういう了見だ！ 俺をコケにしているのか！？」

「はあ！？ 何の話よ！ 沸いてんの！？」

「とぼけるな！ まあ選べ！ ここで決着をつけるか、大人しく謝つて俺の紹介を入れるか！」

「ああもう面倒くさい あ、そうだ」

面倒くさくなつて目を逸らした私は、その先に絶好の突破口を見つけた。『それ』を指さし、男に言つてやる。

「さつき、あいつがあんたのことバカかつて言つてたわよ

「はあ！？」

「…ああ？」

男は私を掴んでいた手を緩め、司を見る。眉間の皺が一瞬深くな
り、司のほうへ歩いていく。「朝！ こっちじやねえよ！」

「…何だ貴様？」

「…お前こそ何だよ」

「ほう。神弥の告発は確かだつたらしいな。俺に正面きつてガンを
飛ばすとはよほど頭が悪いと見える

「お前にガンを飛ばせるとバカになるのか？ だったらウチの三軒隣の金物屋のジジイも、その孫で万引き常習犯のアル君も全員バカ

だな

「…ほりへ..」

「で、どうしてこんなことになつたの、レギン」

「「おい待てババア！」」

みんなは年上の女性にババアなんて言ひすげやダメだよ。こいつらみたいになるからね。「…僕もよく分からんんだ。分かっているのは、相手の力が僕の常識の範疇を超えているということ。向こうは僕の領土の半分を犯すほどの広域魔法をかけるだけでなく、任意の範囲に関して術を一部解除することまでやつていて。魔法だとしたら僕から見ても桁外れの術者だ。母さんやお師匠様だつてきつとできやしない

「だから竜だと思った？　でも、私の感じだと多分、これは竜じゃないわ」

「なら何なんだ？　魔法でも竜でもない、それ以上の強大な力が、僕の国を滅ぼそうとしている　冷静でいろいろ？　フィスタに乗せられた部分もあるけど、一刻も早く対処しなきやいけないのは確かだろ？」

「おいレギン。誰がお前を乗せたつて？」

「行動するのはいいけど、もつと他に方法は無かつたの？　力で何とかできる相手だと思う？」

「敵の拠点は分かつてる。偵察を出しても無駄なのは前回の事件で分かつてる。　だからセオリー通りの手順はこの際飛ばして、最初から直接攻撃をかける事にした。何の意味も無くこの位置に布陣してゐるわけじやない。前回の事件で唯一生き残つた分隊がいたのがこの場所なんだ。敵の攻撃は湖の対岸までは届かない。でも、僕の魔法は届く。うちの団員も本氣を出せば届くだろう。全員のコンティショングが整い次第、魔導師団全員で対岸に一斉攻撃をかける」

「…あんたにしちゃ派手な作戦ね」

「派手にやる必要があるんだ。ここまでやつたら僕の国ではどう思つてゐるのか、ここまでやつたら僕の国ではどういう制裁を受けるの

が、それを国の内外に示す必要がある。　　というのはファイスタの言だけど、僕もそういうのは必要だと思う。たまには締めてからないと

「要は、乗せられたのね」

「乗せてない。助言したまでだ」

「もちろん、それで終わらせるつもりは無い。生き残りがいたら拘束して、正当な裁きの場に臨んでもらう。僕の軍団の半分で先制攻撃をかけ、その後残り半分とファイスタの連れて来た手勢で敵の拠点に侵攻する。魔導師団はファイスタの隊の前方と両翼に配置し、障壁を張つて中央の隊を守る」

「正面突破？ バ力正直に？」

「敵が突入班を迎撃するようなら、僕と特殊工作班が敵拠点に転移魔法で移動し、敵拠点内部で後方搅乱を行う」

「…本気？」

「サイコロ振つて作戦立てたわけじゃないよ」

「超長距離の攻撃魔法と転移魔法を連発で使うつて？　あんたが敵地の真ん中でぶつ倒れたら、それで一切終わりだつて分かってる？」
「そうならないように努力してる。本当は布陣してすぐ攻撃してもよかつたんだが、さすがに無理だと止められた」

「ファイスタに？」

「俺を含めた全員にだ」

「だからこうして小休止を取つてるんだ　　で、神弥卿」

「何」

「君は一体何しに來たんだ？　僕の必勝を期して手作りのクッキーでも持つてきてくれたのか？」

私が入院してる時は、手紙一つ寄越さなかつたくせに。

言いかけて止めた。レギンは私が入院していたことすら知らないのだ。クララはストーカーじみた私への愛の力で察知しただけでたぶん私の城には、クララの放った間諜が紛れ込んでいる。

「　　食べてくれるの？」

「え？」

「作つたら、食べてくれる?」

「 ? あ、ああ。もちろん。 ?」

「ば、馬鹿！ やめとけ！」

「え？」

「？」

「か、神弥卿？」

「……よし！ 今日は久し振りに腕を振るひやうわよ！ レギン、どつかに釣り竿無い！？」

「え？」

「な、何？」

「あ、朝！ 考え直せ！」

「ちょ、ちょっと待つてくれ神弥卿。なんで、クッキーを作るのに、釣り竿が要るんだ？」

「すぐに分かるわよ。で、あるの？ 無いの？」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「ば、馬鹿野郎！」

「お、おいレギン、何だか分からんが早まらないほつが」

「左に三つね！ よしきた！」

私は意氣揚々と天幕を飛び出した。こんなに気分が高まるのは久し振りだ。そういえば、釣り竿はあってもオープンはあるのだろうか。まあいいや。無ければグラウンド・オープンで何とかできる。そういうえばこの湖、食べられる魚はいるんだろうか？ まあいいや。この世に食べられない魚なんていない。「……なあ、君」

「神弥卿は、要するに 料理が、下手なのか？」

「……いや、下手じゃない」

「それは、下手だと云つと神弥卿に殺されるとこいつ」とか?」

「いや、そうじゃない。むしろ朝は、料理は上手い。普通に食えるもん出してくる」

「…なら、何が問題なんだ」

「朝は戦場育ちだ。食えるものなら何でも食つし、むしろその方があいつにとつては普通なんだ。あいつにかかればこの世に食えないものなんか無い。俺達はとても食う氣になれない珍奇な生物も、あいつにとつては久々にありついた」馳走な場合もある

「…」

「し、しかし、神弥は釣り竿が要ると言つたな? この湖には確かに普通の食用魚しかいないはずだ。とりあえずそう深刻な事態には「それがクッキーになるんだぞ?」

「…」

「まあ、俺も食つたことはあるから味は大丈夫だ。原材料さえ気にしなければ普通に食える。 ただ」

「た ただ?」

「釣り竿は、魚を釣る以外にも使える。アリクイはある細くて長い鼻で蟻塚を掘つて蟻を食べる。虫つてのは、局地戦でのタンパク源としてはなかなか高効率で優秀らしいぞ」

「…」

「…」

「…何度も言うが、味は大丈夫だ。だから何食わぬ顔して食つてりや問題は無い。 ただ、クッキーの中身には絶対言及するな」

+

その夜、寝所を用意するといつレギンの申し出を丁重に断り、私と司はいつたん町まで戻つて宿を取つた。

「…と、レギンは思つてゐるはずだ。」「司」

「ちんたらしてないできり歩きなさいよ」

「…うるせえ」

「どうしたわけ？ 私より夜目も利くし私より潜入工作も得意なんだが、なんで今夜に限つて私の後ろを歩いてんの？」

「…久々にいいもん食つたから腹がびっくりしてんだよ」

「おだてても何も出ないよ」

「おだててねえ」

敵はこの湖の対岸、今は廃墟となつた古城に潜んでいるらしい。元々は戦時に造られた塞の一つだつたのだが、それが陥落し、竜側の戦略中継点となり、また人間に取り戻され、やがて戦争が終わつて戦略的価値が無くなり、観光地となり、ホテルが建ち、そのホテルが潰れ、やがて人にも国にも忘れられた場所だ。「わかつた？」司

「わかつた？ ジャねえよ。全部観光ガイドの受け売りじゃねえか」「その観光ガイドを買つて来たのはあんたでしょ。他になんか無かつたの。このヘタレ情報部」

「誰が情報部だ。ぐどいようだが俺はお前の部下じゃない。情報部が欲しけりや自分で作れ」

「やだよ面倒くさい」

「まさかの問題発言だな ところで」

「司が不意に足を止める。 私も止まり、振り返る。

「そろそろ帰つてもらうか」

「そうだね。そろそろ危ないし」

「よし」

司は地面から小石か何かを拾い上げ、指で弾いた。指弾。指弾は私達の後方の茂みに飛び込み、「痛！」何かが声を上げた。

「出て來い。どこの兵か知らんが、この女に挨拶もしないで帰ると何故か不敬罪に問われるぞ」

「何故かじやないでしょ」

「…流石です、神弥卿」

声と共に、茂みの中から人影が現れる。「…先に気づいたのは俺

なんだが」「私だつて気づいてたよ。

あら?」黒っぽい衣装に

身を包んでいるが、その人影は

「貴女　昼間の人?」

「ヴォーディガン魔拳士団の春日小衣《かすがこじろ》です。昼間は失礼致しました」

「今も充分失礼だと思うがな　　で、何の用だ?」

「主から、お一人の監視を命じられました」

「　　フィスター?」

「はい。　　何かやるはずだから、俺の仕事の邪魔になるようなら止める、と」

「　　…」

「…気づかれてたか」

「邪魔をする気は無いわ。むしろ手助けになるとと思つ」

「なら、どうして正式に作戦に参加されないのですか?」

「邪魔はしないけど協力もしない。私はあそこに竜がいるかどうか知りたいだけ。いれば私が殺す」

「　　危険です。最初に接近した部隊が全滅したのは《存知》でしょう?」

「…そうだっけ?　司」

「?　　ああ。そのはずだ」

「…ほんとかなあ?」

「え?」

「レギンが昼間に言つてたよ?　この位置にいた隊は無事だったから布陣した、つて」

「　　え?」

「全滅なんかしてない。生き残りがいたんだよ。でも、レギンは何か事情があつてその事を国民や部下に公表できない」

「　　…」

「　　で、春日さんさ、たぶん生き残りがいたんだけど、その人達はどうして生き残れたんだと思う?」

「え それは、敵の魔法が何か、攻撃の射程外だったからで
「違う。敵は国土の半分を腐食させられる術者だよ？ たかが湖の
こちからあつちまで、届かないはずが無い。レギンやその部下の
魔導師ですらできるのに」

「

「その人達は、わざと生き残られたんだよ。敵が仕掛けた、ここまで安全ですよっていつ、罷」

「そ、そんな

「危険というなら、この湖にいる全員が危険だよ。 貴女もフィ
スターが心配なら、すぐ戻ったほうがいいんじゃない？」

言つて、私は前に向き直つた。「行こう、司」「おう」歩き出す。
「ま、待つて！」

「そこまで分かつてどうして行くんですか！？ 戻つてそれをフ
ィスター様達に伝えて、協力して何か方法を考えれば
足を止める。司も私を抜いて行こうとしたが、私を見て足を止め
る。」「そうね」

「貴女は組織の人間だから、そういう考え方になるんでしょうね
「え ？」

「ううん、わかるよ。私も昔解放軍つていう組織にいたから、皆で
協力しないと何も出来ないっていうのは痛いぐらいよく知つてる。
でもね」

痛いぐらいよく知つている。

誰も協力してくれなかつた。いざという時は誰も頼れなかつた。
自分のせいでの死んだくせに、全部私のせいにされた。守つてやれ？
助けてやれ？

私は。「それはよくない考え方だな

「代償を求めているようでは真の愛は得られない。人の愛を勝ち取
るために、君の想像を絶する努力が必要だ。それを厭わない姿勢
こそが、眞に人から愛され

「黙れ」

「はい？」

「ああ、ごめん。ちょっと虫がね」

小衣を振り返る。澄んだ瞳。組織で戦つていてこんな目ができる子はそういない。ヴォーディガン魔拳士団はスバルタだと聞くが、じついう子がいる限りは、そう悪いところでもないのだろう。

眩しくて、私は前を向いた。

「これだけは、私は他人とは共有できない。共感してもらえないでいい。同情なんかもつと要らない。私がたった一つ欲しいのは奴等の、首。『逃げない自分』

「…」

「…お喋りは終わり。早く行ってあげて。敵は私に気を取られてる。今ならまだ間に合ひ」

歩き出す。司の足音がついてくる。

もう一つ、足音がついてきた。「あれ

「戻らないの？」

「監視を命じられましたので。それに、私も防御魔法が使えます。神弥卿とお付きの方ぐらいなら、守って差し上げられます」

「おい、誰がお付きだ」

「ステキなご提案だけど、私からはお給料出せないよ？」

「いいんです。私も、逃げない自分が欲しいだけですから」

「…」

思わず目を逸らした。「見事な反撃だな」「神弥卿つてす」「いんですね。あんな台詞を真顔で言えるんですから」「…」「めん」「何謝つてるんですか？」「これは恥ずかしがるところですよ？」「…ほんと」「ごめん」

本当のことば、口が裂けても言えない。

私は自分を嘘で塗り固め、それを皆は英雄と崇めている。だから私は、それをプロパガンダに使われることは不満だと言わないと言えない。

ただ

申し訳無いと思つ。彼女には特に。

彼女を帰すための嘘が、裏目に出てしまった。「それに」

「たぶん、私が帰つて報告しても、フィスタ様は逃げない気がして」

「

重い心の鎖を引き千切り、笑つた。「分かつてんじやん」多分、
フィスタもレギンも、生き残りが敵の罠だということには気づいて
いる。知つててあそこに布陣している。敵の手を読み、力を割り出
し、目的を知るために。

これはレギンと敵との、命を賭けた腹の探り合いなのだ。「行
こう」「こう

「多分、今夜はレギンも寝てない。私達が何かできれば、それだけ
本隊の負担も減る」

「はい」

夜が更けていく。私達は湖畔の森を、闇に紛れながら歩く。

?・もしもあなたが「誰かに自分の話を聞いて欲しい」と思つたら（後書き）

といつわけで第一話Aパートです。

朝はサブタイの『病氣』以外にも、致命的な性癖を抱えています。
この次と三話ぐらいでわかります。

感想等ありましたらお寄せください。

次回は第一話Bパートです。レギンの秘密が、小衣の真心が、朝の
眠つていた何かを目醒めさせます。

ご期待ください　といつかもうやつてます。ご検索ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8782p/>

タラスクス～朝の病名～？ 1

2011年1月9日05時06分発行